

事例29

< 事例概要 >

迷入

- ① 80 歳代、肺炎、急性呼吸促迫症候群で人工呼吸器管理下の弁置換後の患者（転倒による多発肋骨骨折、外傷性気胸・肺挫傷で入院した後、呼吸状態が悪化し人工呼吸器管理となった）。
- ② 右内頸静脈に留置中のカテーテルが長期留置となり、中心静脈カテーテルを入れ替え予定。
- ③ BMI 17.9 kg/m²。抗凝固薬と抗血小板薬を服用中、休薬なし。
- ④ 左内頸静脈より作図法で長針を使用し穿刺。ガイドワイヤーを20 cm挿入。カテーテル挿入後、スムーズな逆血を確認し固定したが、X線で無名静脈にあると判断し12 cm引き4 cm進め再固定、X線で確認せず輸液開始。翌日、徐々に血圧低下し、心肺停止。カテーテルより救急治療薬を投与。X線で左肺野全体の透過性低下、超音波で左胸腔内液体貯留を認め、胸腔穿刺を施行し、胸水約2,200mℓ 排液後、経皮的動脈血酸素飽和度（SpO₂）100%。輸液開始から約1 か月後に死亡。
- ⑤ 死因は、敗血症性ショック、ARDS増悪。死亡時画像診断（Ai）無、解剖有（中心静脈カテーテルが内頸 静脈には入らず、その背側を通り無名静脈を貫通し胸腔内に迷入）。